

One purpose

FOR BETTER COMMUNICATION



同志社大学通信
DOSHISHA UNIVERSITY

170

2012
April



特集

同志社と音楽、その親愛なる関係

●同志社人訪問

株式会社 カメラータ・トウキョウ

井阪 紘さんに聞く

『ONE PURPOSE』は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションをはかることを目的として発行しています。ささいなことでも結構ですので、どしどし広報課までご意見・情報をお寄せください。

※今号に登場する学生の学年は取材時によるものです。



特集

同志社と音楽、 その親愛なる関係

2

ゼミ探訪 学びの時間

9

生命医科学部 医情報学科 力丸 裕 研究室

同志社の研究は今

11

東アジア総合研究センター 鄭 躍軍 文化情報学部教授

新島襄と八重の足跡ツアー

13

CAMPUS NEWS

15

京田辺校地 開校25周年記念式典・同志社京田辺祭2011開催／ホームカミングデー2011開催／東日本大震災で被災した在学生への義援金について／グローバル・コミュニケーション学部開設記念シンポジウム開催／特定寄付奨学金募金協力者ご芳名／新任教員紹介／退職教員／本学教員執筆図書紹介／新島旧邸の開館日・見学方法の変更について

留学生紹介

19

デブリーズ ピーター マケンジさん(グローバル・コミュニケーション学部)

INTERVIEW ～同志社人訪問～

20

株式会社 カメラータ・トウキョウ 井阪 紘さんに聞く

MY JOB, MY LIFE ～シリーズ 私と「仕事」～

23

- ・林 英生さん(1999年 法学部法律学科卒業)
- ・西 麻沙子さん(2000年 文学部英文学科卒業)

ANNOUNCEMENT

25

MY PURPOSE

27

5カ国の聴覚障がい学生が集う研修会に参加～障がいとまっすぐ向き合い、「伝える」ことの大切さを学んだ～
丹後 偉也さん(理工学部情報システムデザイン学科3年次生)

表紙の情景 [新島遺品庫]



今出川校地の東部、光塩館前に建つ煉瓦平屋建ての収蔵庫。「Doshisha College Song」の作詞者で、建築家としても有名なW.M.ヴォーリズの設計で、1942年に完成。建坪24坪半。入口のひさしの下には新島家の家紋「根笹」が刻まれている。収蔵庫には書簡、日記、ノート類、説教・演説草稿、公務記録・文書、軸物、絵画など、新島襄や八重、同志社関係の資料約6,000点が収蔵されている。学校に不満を抱いた学生たちが無断欠席した責任は校長にあると、新島が自らの左手を杖が折れるほどに激しく打ったエピソードで

有名な「自責の杖」もここに収蔵されている。内部は非公開だが、インターネット上で新島遺品庫資料の公開をしているほか、Neesima Room(展示室、ハリス理化学館2階)の常設展で一部展示している。

同志社と音楽、その親愛なる関係

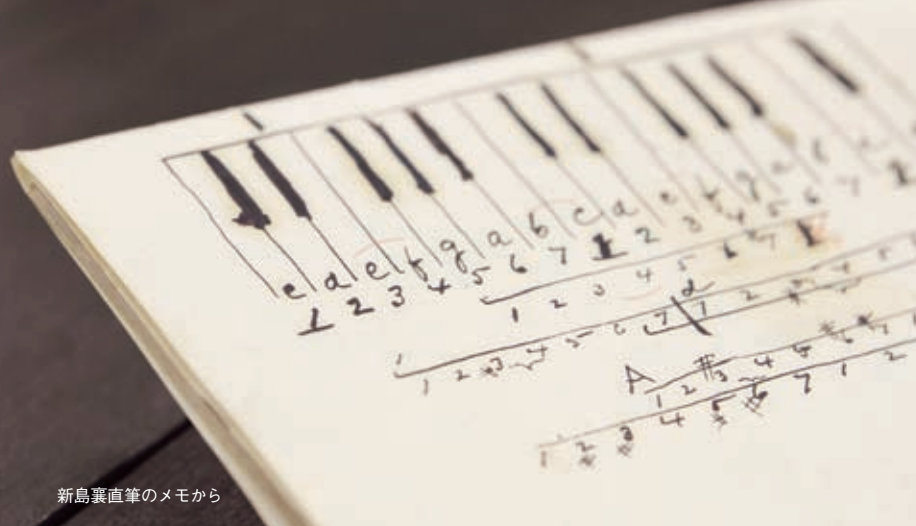
同志社の学生は古くから音楽に親しんできた。

礼拝での賛美歌、宣教師から伝え聴いた異国の音楽、全同志社演奏会にはじまる音楽会やメサイア演奏会、そして、同志社のためにつくられ、歌いつがれてきた数々の歌――

それらは、志を同じくする者の結社、同志社の名のもとに集う人々の連帯感を高め、

同志社人としてのアイデンティティーの醸成に一役買ってきた。

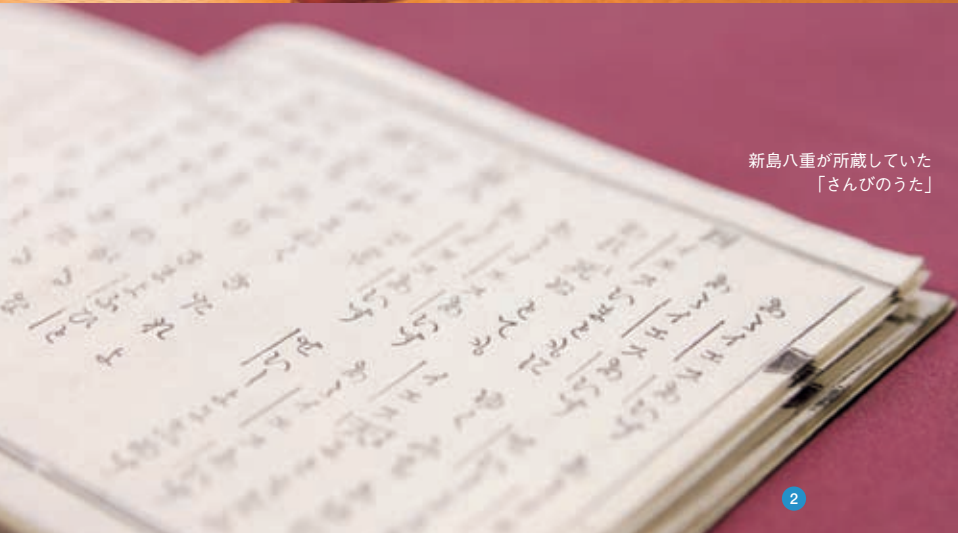
ここで改めて、同志社と歌、音楽について、その成り立ちや、実際に音楽界で活躍する卒業生の姿を通して考察したい。



新島襄直筆のメモから



新島旧邸に残っているリードオルガン



新島八重が所蔵していた
「さんびのうた」

同志社人の魂——【Doshisha College Song】

入学式、卒業式をはじめ、大学行事やクラブ・サークルなど、様々な場面で歌われるのが「Doshisha College Song」(以下、カレッジソング)。元気に満ちたメロディーと同志社の理念に重なる歌詞を持つこの曲を、同志社の学生ならぜひ知っていてほしい。カレッジソングが生まれた背景とその意義について、本学で最も歴史があり、同志社の音楽シーンを牽引してきた「同志社グリーククラブ」のOBで、現在は同クラブの指揮者・技術顧問を務める伊東恵司氏(京田辺校地総務課総務係長)に聞いた。

新島の精神が息づく代表曲

カレッジソングのことを考えると、1つの美しい風景が思い出されます。1993年の9月に、私は同志社の聖地ともいえるグレイス教会でステンドグラスを見上げながら壇上で指揮をしていました。新島生誕150周年を記念して、同志社グリーククラブとそのOBが、ボストンの新島ゆかりの地を訪れ、そのスピリットを再確認するという演奏旅行をしていたのです。グレイス教会とは言うまでもなく、1874年のアメリカン・ボードの年次大会で東洋の小国から来た青年(新島)が演説をし、その演説に感動した人々から5,000ドルの寄付の約束を受けたというあの教会です。帰りの汽車賃である2ドルを置いて、自分たちは歩いて帰ったという老いた農夫と夫人の話も有名ですね。同志社の礎はこのときの寄付だったといえますから、この地の温かな心から同志社が始まっていることを実感しました。しかし、なお素晴らしいと思えたのは、この旅の経緯を伝えたと、最後にカレッジソングを歌った場面です。満場の来場者が一斉に立ち上

がり、惜しめない拍手を送ってくれたのです。多くの人の寄付から出来た日本の大学が豊かな発展を遂げ、美しい音楽をもって感謝と友情の気持ちを伝えるにきたということで、現地でも大きな話題として取り上げられたものでした。

新島が学んだフィリップス・アカデミーもアーモスト大学も、クワイヤが多数活躍し音楽の盛んな学校ですが、同志社大学もまた、古くから音楽活動が盛んで多数の音楽関係者を輩出していますし、オルガンの音、鐘の音、歌声に満ちた大学だと思っています。賛美歌のみならず、音楽は心の豊かさや他者への想像力を育むものであり、新島の精神や同志社教育の根底に通ずるものであるといえます。その代表がカレッジソングです。カレッジソングというタイトルですが、大学だけでなく、法人内諸学校でも校歌として歌われる、同志社の魂ともいえる曲です。

1番と4番の歌詞に込める思い

この歌は、1908年にWilliam M. Vories(以下、ヴォーリス)が英語で作詞し、翌



前列右から3番目がW・M・ヴォーリス
1930年11月11日、ヴォーリス来訪時に教職員とともに啓明館前で撮影

名の通りOne Purposeです。そこに詩想の根柢をおいて書きました。歌詞は4番までありますが、例えば同志社グリーククラブでは、オフィシャルな場面では1番と4番を歌っています。これは、かつて西郷辰三郎先生(元同志社香里中高教諭)がアメリカ留学中にヴォーリス氏に会い、「ご本人から「歌うなら1番と4番を歌ってほしい」と言

1909年に同志社校歌として制定されたと伝えられています。校歌となったいきさつについては、この当時学生だった片桐哲先生グリーククラブの創設者、女子大学初代学長を中心とする音楽好きの学生たちが、宣教師の先生方に同志社の校歌がほしいと申し出たところ、先生方が相談し、ヴォーリス氏に作詞を依頼されたということです。ヴォーリス氏は、アーモスト館や啓明館などの設計者としても有名ですが、当時、建築の仕事の関係で京都に滞在しており、同志社の教員とも懇意にしていたのです。ヴォーリス氏はこの歌詞についてこう語っています。「同志社の性格は、その

われたことに端を発しています。2番の“For God, for Doshisha, and Native Land!”よりも4番の“For God, for Doshisha, and Brotherhood!”…つまり、「祖国のために」「よりも「世界同胞のために」と歌ってほしいということです。時の総長大塚節治先生もこのことを大事に思われ、2節歌う際には1番と4番を歌うようになったのです。アーモスト大学にある新島の肖像画が第二次世界大戦中にも外されなかったという話がありますが、日米にまたがって活動しながら、それぞれの国の正義のために起こったともいえる戦争を経験したヴォーリス氏の同志社へのメッセージとも取れます。

DOSHISHA COLLEGE SONG

Words by W. M. Vories Music by Carl Wilhelm

1. Our purpose, Godlike, thy name
Dost signify: one lofty aim
To win the crown in heart and hand
To live for God and Father-land
Dear Rhine-Maler, sons of Rhine
Shall be as brothers to the vine
Thou through the world we wander far and wide,
Still in our hearts thy precepts shall abide!

2. We came to Doshisha to find
The broader culture of the mind,
The vision of a purpose true;
Dear Rhine-Maler, mark the art
To face the future steadily of heart,
Since thou hast taught us with high aim to stand
For God, for Doshisha, and Father-land!

3. When war clouds bring their dark alarms,
Ten thousand patriots rush to arms,
But we would through long years of peace
Our Country's name and fame increase
Dear Rhine-Maler, sons of Rhine
Will hold their lives a trust divine,
Dedicated to purpose we will ever stand
For God, for Doshisha, and Father-land!

4. Still broader than our land of birth,
We've learned the oneness of our Earth;
Still higher than our aims we find
The love and service of mankind,
Dear Rhine-Maler, sons of Rhine
Would strive to live the life divine,
That we may with increasing years have stood
For God, for Doshisha, and Brotherhood!

W. M. Vories
一柳米来留
February 7, 1902

同志社 校歌 対訳 (児玉実英 訳)

- 同志社よ、その名は一つの目的を意味する。
その生徒の精神的、肉体的に、
神のため、祖国のため、生きんという
一つの崇高な目的を。
親愛なる母校よ、同志社の生徒は、
ぶどうの枝のごとくつながりゆくことであらう。
たとえ、世界くまなく、広くはるかに、
われらさまようとも、汝の教訓は、
われわれの心に永遠に生き続けることであらう。
- われわれが同志社にきたのは、
心のより広き糧を求めた。
われわれは、真の目的の価値を、
新たな意味において学ぼうとし、
ここにふみとどまっているのだ。
親愛なる母校よ、われわれのつとめは、
堅き心をもって、未来に立ち向かうことである。
なぜなら同志社は、
神のため、同志社のため、また祖国のために
役立てよと、高い目的をもって
われわれに教えてきたからである。
- 戦雲がその険悪な動向を示すとき、
いく万の愛国者は、武器をもってはせ参ずる。
しかし、われわれは、
久しきにわたる平和の年月のうちに
祖国の名と名声を、いやましにしたいと願う。
親愛なる母校よ、その生徒は、その生涯を、
いつまでも神への信頼に捧げるであらう。
確固不動の目的をもって、われわれは
たえず神のため、同志社のため、
また祖国のために、立とうとするものである。
- われわれが生まれた国よりも
さらに広い世界といえども、
それは一つであることと、われわれは学んだ。
自己愛よりもいや高き人類愛と、奉仕の精神を
われわれは会得した。
親愛なる母校よ、その生徒は
聖なる生涯を送らうがため、励もうとしている。
重むゆく年とともに、
神のため、同志社のため、同胞のため、
かえりみて悔いならんがために。

◀W.M.ヴォーリス(一柳米来留)のサイン入り「Doshisha College Song」の譜面



誇りを持って歌いたいところですね。
一方、作曲はヴォーリス氏ではなく、当時はよくあったことですが、アメリカのイエール大学の校歌の旋律をそのまま用いています。当時の同志社にはイエール大学出身の宣教師や教員が多く、その慣れ親しんだメロディーを採用したのではないかと思います。イエール大学にも名門グリーククラブが存在し、何度か来日しているの、同志社グリーククラブと並んで同じ旋律の校歌を歌い合うというシーンはいくらも実現しています。

しかしながら、さらに辿ると、この曲の原曲はドイツの愛唱歌、Carl Wilhelm 作曲の「ラインの守り」(1854年)なのです。よく指摘されることですが、映画「カサブランカ」でドイツ軍がこの歌を歌っている場面

「同志社グリーククラブ」指揮者・技術顧問 伊東恵司(京田辺校地総務課総務係長)

「学生、卒業生、人と人を結ぶ歌」
最近では歌で連帯するというのが気恥ずかしい風潮もありますが、かつてはラグビーや野球でも応援に来た学生がよく熱唱していました。私自身も学生時代に、勢いあまって渋谷のハチ公前で早稲田大学の学生と互いの校歌の歌合戦をしたことがありますが、その時、卒業生らしい若いサラリーマンが駆け寄ってきて「東京に来て辛かったが、久しぶりに同志社の歌を聴けてうれしかった、絶対頑張る！」と言って去って行かれたことがあります。学生部(現在の学生支援センター)勤務だった時、引率した函館キャンパスの途中、たく

さん議論を経た後に「新島襄海外渡航乗船之処」碑の前で学生たちが卒業生とカレッジソングを歌ったのも感動的な場面でした。ある学生からはクラブ活動で訪れた離島のハンセン病施設で涙ながらに歌った別れのカレッジソングの話を繰り返し聞きました。志半ばで亡くなった友のために言葉を探した挙句見つからずに咄嗟に歌った某クラブのカレッジソングも目の当たりにしました。きつと無数にあるこのような光景……「One Purpose」(この冊子のタイトル)のもとに人が集い、歌うことでその気持ちを確認し合う、励まし合う、という光景は、学生の命輝くシーンに相応しい、本学の理念に直結したものだとも思えます。

同志社と「メサイア」の軌跡



2011年12月24日第47回全同志社メサイア演奏会



1935年メサイア全曲初演の様子、栄光館にて

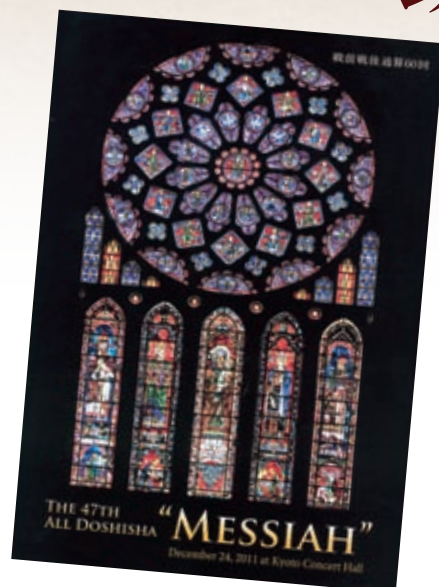
ハレルヤコーラスで知られ、世界中から愛されるヘンデルの名曲「メサイア」全曲の本邦初演は、この同志社大学なのです。初演は1935年の同志社創立60周年記念演奏会。ドイツ語の歌詞で歌われました。グリーククラブ出身で神学部講師の森本芳雄先生が不眠不休で全パートの楽譜を書き写され、学生やOBを掻き集めて厳しい練習を重ねられました。その演奏の模様は、当時としては破格の扱いで、NHKラジオが全国に生中継したそうです。その後もメサイアの演奏会は続き、不幸な戦争時期においてさえ工夫して日本

語で歌うことで毎年の演奏を継続してきたのですが、先生の急逝等の理由で一時期中止となります。

復活は同志社創立90周年の1965年。交響楽団とグリーククラブの学生が何とかメサイア演奏会を復活させ

たいと願い、その熱意を受けて同志社女子大学学芸学部音楽学科が全面的に協力するという形で実現します。このメサイアが今も続く復活メサイアです。復活した同志社メサイアは再び発展を遂げ、クラシックの演奏会では第九と並んで確実に超満員になる演奏会として京都の音楽シーンを彩り続けています。古くはクリスマスイブを同志社の学生が2人で過ごす場としても定着していたようであり、KBS京都テレビが録画し、年末にテレビ放映していた時期もありました。

近年になって、女子大学の学科としての参加が得られなくなっただけで、女声部の歌唱メンバーが激減し、開催が危ぶまれた時期がありました。話を聞いた多くの同志社メサイアファンや卒業生の皆さんから嘆願書が提出されるなどして、今では大学学生支援課の協力による公募合唱団(女声)の参画により、新しいスタイルのメサイアとして毎年12月24日の演



メサイアパンフレット表紙

奏会を継続しています。昨年は戦前戦後通算60回を記念し、学生の発案で初めて字幕をつけて上演され、注目されました。

山田一雄、渡辺暁雄、朝比奈隆、井上道義等、そうそうたる指揮者がタクトを振り、その都度、同志社メサイアの伝統と取り組みが高く評価されてきました。オープニングの「Doshisha College Song」アンコールの「きよしこの夜」(有名なキャンドルライトサービス)を含め、「全同志社メサイア演奏会」は人に対する温かさや世界に対する想像力に溢れ、キリスト教を徳育の基本に据えた大学の雰囲気を感じたりと感ぜさせてくれるものです。基本的な運営や取り組みは学生によって行われており、学生のひたむきさを感じさせるとともに全国規模で本学の学生活動が高く評価されている場面でもありますので、ぜひ会場で聴いてほしいですね。

「同志社大学歌」を作曲した
山田耕柞氏自ら栄光館で
学生に歌唱指導した



山田耕柞氏のサイン入り
「同志社大学歌」の譜面



それぞれの歌、特別な歌

本学の音楽・合唱活動は非常に盛んで、

学生時代の活動から

音楽評論家や指揮者、

声楽家等多くの音楽

関係者が誕生し、日本

の音楽シーンそのもの

にも大きな影響を及

ぼしています。現在で

も5つの合唱団がレベ

ルや人数を保って活

動していることは特

筆すべきことです」

学生の歌声は、漏れ聞

こえるオルガンの音色

や朝夕の鐘とともに

同志社教育のアトモ

スフェアとして同志社人の心を潤してき
たのではないでしょうか。

同志社大学にはたくさんの方がいます
が、有名なものをいくつか紹介しましょう。

応援団によってよく演奏される応援歌
「Doshisha Heroes」は、もとはアーモス

ト大学の「Cheer for Old Amherst」から
来ています。ラグビー部が部歌にしてい

たのですが、その後半の繰り返し部分が
「Doshisha Heroes」です。同じく応援歌

「若草萌えて」は南北戦争時のアメリカで
流行した「Tramp! Tramp! Tramp!」が元

歌になっています。ちなみにこの曲が北海
道大学の校内で流れていたのが驚いたこ

とがあります。新島とも親交のあったク
ラーク博士が伝えたものだそうです。北大

の校歌と共有しているのですね。それに対
してオリジナルでは同志社創立60周年を

記念して「同志社校歌」(湯浅吉郎・作詞
／大中寅二・作曲)と「同志社大学歌」(北

原白秋・作詞／山田耕柞・
作曲)が作られています。後

者は大学の入学式で必ず歌
われる曲ですが、山田耕柞氏

にとっても自己の音楽の理
念を体现した会心の作だっ

たようです。最後に「送別の
歌」をご存知でしょうか。



1916年の卒業式で初めて歌われた
曲で、以後卒業式には欠かせない曲とな

りました。L.M. Enlizer 作曲の原曲が
あり、三輪源造氏(同志社女子専門学校教

授)が作詞編曲をされたこと以外の詳細が
分かっている曲ですが、この歌が忘れら

れないという卒業生が数多くおられます。
別れの涙と旅立ちの励ましを歌っており、

逞しい心やその繋がりを大切に育むこと
を目指した同志社ならではの気品と情趣

に満ちた名曲です。同志社だけの特別な卒
業ソングというところでしょいか。

今回紹介した曲はすべて、「Doshisha
College Song」というCDに収録されて

おり、入学前の手続き書類に同封して郵
送しています。この機会に聴いて、学生生

活を彩る豊かな同志社の音楽に触れてく
ださい。

解説：同志社グリークラブ「指揮者・技術顧問
伊東恵司(京田辺校地総務課総務係長)

「Doshisha College Song」をはじめとする
同志社の数々の曲のCDや歌集は購入することもできます。



●「Doshisha College Song」
(12曲入りCD)
400円

●「同志社歌集」
(同志社大学出版部刊)700円

販売元：株式会社同志社エンタープライズ
お問い合わせ先：
075-251-3027



音楽は神様からの素晴らしい贈り物

り抜け、第11期生としてオペラ歌手への第一

にありますが、うと言いたいですね」



撮影：飯島隆／
兵庫県芸術文化センター

高校卒業まで過ごした小樽では、幼い頃にバイオリンを習っていたものの、実家の教会で聖歌などを歌う以外は、音楽にはほとんどなじみはなかったという。

「小樽の友人は、私が音楽の道に進んだと言うと、みんな驚きます」

同志社大学に進み、グリークラブに入っ

たのは、思いがけず勧誘されたことがきっかけだった。練習を見学して「かっこいい！」と感動し、その

日に入部を決めた。授業は欠席しても、ほぼ毎日あるハードな練習には欠かさず参加するほど、男声合唱団の活動は楽しかった。

「同志社のグリークラブは聴衆と一体になる音楽がモットー。ステージから観客に訴えかけるつもりで、とにかく声を出す。私でもこんなに声を出して歌えるんだと、そこで初めて歌うことの楽しさに目覚めた」

卒業を迎え、就職することも考えたが、姉が国立音楽大学を出て二期会合唱団に入っていたことから、オペラという世界に少なからず関心があったことと、グリークラブの先輩の紹介もあり、大阪音楽大学以下、音大へ進学。本格的に音楽の世界で生きていくことを決める転機は1995年、

音大を卒業する前年に訪れた。堺シティオペラでのドイツ・ケムニッツ歌劇場との共同制作の公演。モーツァルトの「魔笛」で主役のタミーノを演じる本役の歌手に代わって、本公演の舞台に立つことになったのだ。それが、テノール歌手・小貫岩夫のデビュー。

「私は本役の方が忙しい時などに稽古の代役を務めていたのですが、ドイツの演出家が私の歌を聴いて抜擢してくれたのです。テオ・アダムら世界的歌手と共演し、『この世界でやっていけるかもしれない』と、その時思いました」

音大卒業後、姉のすすめで文化庁オペラ研修所へ。今、日本のオペラ界で活躍する歌手の大半は、この研修所の出身。難関をくぐり抜け、第11期生としてオペラ歌手への第一

歩を踏み出す。

研修所修了後は二期会に所属。2000年、R・シユトラウス「サロメ」で新国立劇場デビューを飾り、以後、二期会公演を中心に数多くのオペラの舞台を踏む一方、コンサート活動も精力的に展開。テレビ・ラジオにも度々出演し、その叙情的な歌声で多くの人々を魅了し続ける。

「歳を重ねると、後進の指導にあたる機会が多くなりますが、私は歌うこと、芝居をすることが好きなので、役の幅を広げ、できるだけ長く舞台に立っていたい」という小貫さん。自分にとって音楽とは、という問いかけに、こう答えてくれた。

「音楽は神様が与えてくれた素晴らしい贈り物です。いい音楽に出合えば感動するし、音楽によって人は幸せになれる。神様にありがたうと言いたいですね」



小貫 岩夫 さん

【1992年 神学部卒業】 テノール歌手

1967年北海道小樽市生まれ。同志社大学卒業後、大阪音楽大学を首席で卒業。文化庁オペラ研修所修了後、98年より1年間、文化庁派遣芸術家在外研修員としてイタリア・ミラノへ留学。2000年「サロメ」で新国立劇場デビュー以来、二期会、新国立劇場を中心に活躍。代表作は02年「ニュルンベルクのマイスタージンガー」のダーフィット、06年「コジ・ファン・トゥッテ」(宮本亜門演出、文化庁芸術祭大賞受賞)のフェランド、07年、10年に出演した「魔笛」(実相寺昭雄演出)のタミーノなど。

音楽は私にとってかけがえのない世界

して、どのように作曲活動をすれば良いのか

6歳からピアノを習い始め、両親はピアノの道へ進ませたいと願った。高校3年の時、芸術大学のピアノ科へという用意されたレールに反し、「子供の頃から、私にとって音楽は憧れるものというより日常のものだったから、ピアニストになる決断はできなかった」と言う岸野さんは、「音楽以外の世界を見たい」と、中学・高校と通った同志社へ、大学もそのまま進むことを選択する。

ロフエッショナルとして生きるために、もう一度音楽をきちんと勉強したい。そう思った岸野さんは、作曲の技法を学ぶためにフランスへの留学を決断した。

でも、なぜピアノではなく作曲なのか。

途方に暮れたという。レジデンスコンポーザーという、国や地方自治体などがスポンサーになって芸術家をサポートするシステムを利用し、作品を書き始めた。

作曲家の世界は、資格試験があつてそれにパスすればプロとしてやっていけるとい

うものではない。何かのきっかけで委嘱がきて曲を作り、作品が認められてまた委嘱がくる。その積み重ねがキャリアになっていく。だから、「コンクールなどでの受賞は励みになります。作品の善し悪しの絶対的な決定ではありません。その都度、依頼された仕事にベストを尽くすだけです」と話す。

「現代音楽の分野で、作曲の委嘱だけで生活している人は非常に少ないです。作品依頼は定期的にあるわけではなく、不規則で

先が読めない。大学や専門学校で教鞭をとりながら作曲活動をする人も多いです。喜びも大きいけれど、膨大なエネルギーを要する厳しい職業だと思います」

だが、それを選んだことに後悔はないと、岸野さんは言う。

だが、音楽とほとんど無縁の4年間を過ごし、卒業時に考えたのは「企業に雇われて過ごすか、それとも一生の自分の仕事を持つか」。ピアノに戻ることは頭になかった。しかし、幼い頃から多大な時間とエネルギーを費やしてきた音楽の世界は、自分にとってかけがえのないものだと思いつく。プ

「自分の感性、その時々自分が大切と思うことに忠実に、自分の内面に耳を澄ませながら作品という有機体を生み出していく」と、そんな仕事を持ち得たことはかけがえのない幸せですから」

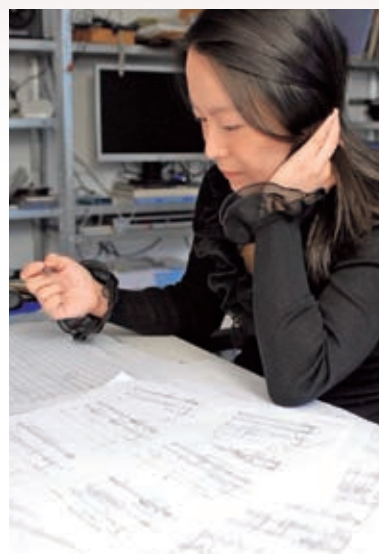
岸野さんは言う。



岸野 末利加 さん

【1994年 法学部法律学科卒業】現代音楽作曲家

1971年京都市生まれ。同志社大学卒業後、95年渡仏。98年パリ・エコールノルマル作曲科、2003年フランス国立リヨン高等音楽院作曲科卒業。04-05年イルカム(フランス国立音響音楽研究所)研究員。オーケストラ、室内楽、ソロなどの器楽作品から、楽器と電子音響を併用するライブエレクトロニック作品までを手がける。作品は、ヨーロッパを中心に、各国で委嘱初演、放送されている。日本では、今秋、9月に合唱曲が大阪いずみホールで、11月に東京証券会館ホールで三十絃箏のための新作が演奏される予定。





生命医科学部医情報学科 力丸裕研究室

英語を公用語に実社会でも 通用する問題解決能力を養う

1887年、同志社病院・京都看病婦学校を創設した新島襄は、医療を中心とした身体に関わる教えの重要性を説き、医学部（医学部）構想を持ち続けた。その志は没後も受け継がれ、2008年4月、工学研究で培ってきた知識と実績をもとに、医学や基礎生物学などを融合した生命医科学部が誕生した。

医工学科、医生命システム学科、そして医情報学科の3学科で構成し、いずれも「医」の文字が入るが、言うまでもなく3学科とも医師を養成することが目的ではない。とくに、ヒトや動物を対象に、最先端の生体計測技術を通じて生体の情報処理機能を解明し、脳機能の分析や新しい診断機器の開発を目指すのが、情報・電子工学と医学が融合した分野を学ぶ医情報学科だ。

「当研究室は研究の対象がヒトや動物ですから、その意味では生命、生体に特に関わりが深いといえるでしょう。刺激に対する反応といった感覚系や神経系の因果関係を解明するのが、われわれの基本路線です。したがって非常にサイエンティ

フィックなのが特徴です」

こう話す力丸裕教授は、音、特に音声や音楽を聴くための脳内の仕組みの解明とその応用が研究テーマ。独自開発した超小型テレマイクシステムを用い、超音波をソナーとして飛ぶコウモリの飛行の仕組みを探る研究は、国内外から注目されている。

学生が研究のテーマを選ぶのも、音や音声に関することが基本。ただ、そのアプローチの仕方は、神経生理学的な手法を使う場合もあれば、心理学的、行動学的な手法を用いる場合もあり、取り組む研究はバラエティに富んでいる。力丸教授は、研究室のウェブサイトで、学生向けのメッセージにこう記している。

「研究には、『どうして?』というすなおな疑問と興味が何よりも

大切です。富士山頂への登山道がいくつもあるように、『どうして?』の疑問と興味を征服するための方法は、ひとつではありません。時間はかかるけれど、緩やかな道筋、最短距離の急勾配、回り道をして最後に頂上をめざすルートなど。また、途中でバスに乗る方法、初めから歩く方法、途中下車して案を練る方法もあります。この研究室での頂上への挑戦、すなわち、諸君の研究戦略もこれに似ています」

力丸裕

【生命医科学部教授】





生命医科学部のゼミは4年次からスタートするが、力丸研究室では、大学院生と合同でゼミが開かれている。春学期は、学生が研究したいことに関連する英語の論文を先生が割り振り、各自で読み込んで発表する。発表はもちろん、質疑、討論もすべて英語で行われる。秋学期になる

と、学部生は卒業論文、大学院生は修士論文の執筆に向けた、自身の研究や経過報告の発表に変わる。発表後のディスカッションで、実験方法や分析の仕方を確認し、他の有効な方法をアドバイスするなど、導くべき答えの道筋をサポートする。この段階では、学部生は日本語での発表でも構わない。

ゼミを英語で進めることについて力丸教授はこう語る。「今は企業でも英語を共通語にするところが増えていきますから、そういう意味で道具としての英語の重要性が高まっています。しかも、何となくわかるというのではなく、仕事で使えなければ意味がありません。ですから、自分の伝えたいことを100パーセント伝え、相手のことも理解するという英語がわれわ



たことを実感しているようです」。

実際、学生たちにゼミで得たものは何かと聞くと、多くが英語力を挙げた。4年次生の鳥越祐樹さんは「一番の収穫は、英語への抵抗感がなくなったことです。以前に比べ、かなり使えるようになったと思います」と言う。「海外から有名な先生が来られて、幸運にも共同実験をさせてもらいました。やり取りはもちろん英語。先生の方にサポートはしていただきましたがゼミのおかげで外国の人と話す時の緊張感

はありませんでした。今は英語に対する恐怖感がなくなっています」と話すのは、工学部を卒業後、大学院生命医科学研究科に進学した福島慶三さんだ。

ゼミ生たちはこうした英語への自信とともに、物事の因果関係を理解し、問題を発見する力とその解決能力を身につける。力丸教授をサポートする小林耕太助教は、学生に「科学に必要な考え方は、物事の因果関係を理解して、それに基づいて問題を解決し、発展させていくことです。ですから、その考え方自体を獲得してほしい。それができればどこへ行っても役に立つと思います。できれば科学者になってほしいですが、そうならなかったとしても、科学者のマインドは身につけてほしいですね」と望む。

2011年度、生命医科学部1期生の進路が決まった。力丸研究室では、就職を希望した6人全員が一般企業への就職を決めた。「医療に関するモノづくりをしたい」と、生命医科学部に入学した竹尾英里子さんは、ソフトウェア開発の会社。中村有香さんは送電設備のメーカーで技術営業として働く。

「研究は楽しい」が力丸研究室の合言葉。最後に、学生たちが実際に研究を楽しんだかを聞いて

みた。「最初の準備段階は大変ですが、わからないことがわかってくると、とても楽しい。高揚感のようなものが湧き上がってきます」と笑顔で答えてくれたのは、他大から生命医科学研究科に進んだ山岡沙織さん。

「楽しいというところに到達すると、そこからまた次のものが見えてくるのです」力丸教授の言葉は、研究室にとどまらず、同志社大学の理系学部すべてに共通するフィロソフィーなのかもしれない。



東アジアの相互理解を深める ～中国・韓国と連携し、共同研究プロジェクトを推進

東アジア総合研究センター

ヨーロッパの欧州連合(EU)や、北米の北米自由貿易協定(NAFTA)に見られるような地域統合が、未だ実現しない東アジア。その理由は何なのか、本格的に東アジアが地域統合していくために必要なものは何なのかを根本的に見直すことを目的として、2009年12月、「東アジア総合研究センター」が誕生した。現在までの歩み、研究成果とその情報発信、これから社会に果たす役割などについて、センター長を務める文化情報学部の鄭躍軍教授に伺った。

テイ ヤク グン
鄭 躍軍
【文化情報学部教授】



東アジア総合研究センターには、2つの大きな特徴があります。1つは、「データを中心にものを語る」ということ。データ分析によって、情報を発信していくという考え方です。これに関連した「現地調査(フィールドワーク)」が2つ目の特徴です。現地調査は、実際には2000年から始まり、センターが開設されるまでに、すでに約10年分のデータが蓄積されてきており、これらのデータを活用して、最終的には東アジアのデータアーカイブを構築していくことを目指しています。

東アジア研究は、これまでも様々な専門分野の研究が個別に行われてきましたが、当センターでは東アジアの「文化の変容」の研究に取り組んでいます。例えば、歴史的に見れば、中国、日本、韓国は、漢字文化や儒教思想を共有していましたが、日本の明治維新以降、それぞれの国は異なる道を歩んできています。その変化について、実はお互いに理解し合っていないことが、数々の問題を生んでいる要因ではないかと私はみています。この問題を解決するためには、今一度、お互いの国への先入観を払拭して、真剣にお互いの立場を理解し合うことが必要です。そうすることによって、東アジア地域共同体が初めて生まれるのではないかと考えています。また、文化的な交流や政治的な活動も、足並みが揃うまでには至っていません。その背景を解明するには、単なる個人の憶測では説得力がありません。現地

A: 2010年3月開催のセンター
設立記念国際シンポジウム
の様子

B: 2011年に中国人民大学にて
行った現地調査訓練の様子



発信を積極的にしていくことが当セン
ターの使命なのです。

調査によって、
各国の文化が時
代とともにどう
変容していった
のかデータを集
積していくこと
で、初めて発信
権が得られるも
のと考えていま
す。特に、グロ
ーバル化が欧米の
主導で進んでい
ることには危機
感を持っていま
す。アジアから、
事実に基づいた

東アジア研究についての方法論と理論
的基盤を構築するには、広い分野の研究

現在、取り組んでいる研究テーマの1
つは、価値観の比較です。環太平洋地域
の国々の価値観を踏まえた上で、東アジ
アの特徴を洗い出し、年内に国際シンポ
ジウムを開催する予定です。もう1つは、
私が主導している環境意識調査です。
2010年度に日本と韓国の全国調査を
行い、2011年度には、中国の北京と杭
州についてのデータを集めました。

信しています。

その上で見ていきたいのが、企業活動を
含めた「経済問題」です。現在、各国間で企
業進出が活発になってはいますが、その中
でトラブルも少なくありません。これは
企業文化と各国固有の文化との衝突がど
うしても発生してしまうためです。これ
を解決するために、何が必要なのかとい
うことを研究し、情報発信していきたい
と考えています。また、「環境問題」も重要
です。国際会議などで、各国が非難し合う
ような場面が見られますが、それでは問
題は解決しません。国の社会制度、経済発
展のレベルが異なるわけですから、同じ考
え方を求めること自体が不可能なことデ
ス。その差を認めた上で、お互いの共通点
を見出す、あるいは協力体制をつくり出
すための基盤づくりが必要です。以上、文
化、経済、環境の3つの観点から研究を進
め、東アジアに関する報告書や書籍の出
版、シンポジウムなど、総合的な情報を発
信しています。

者の協力が不可欠であるため、当初から、
国内のみならず韓国、中国の大学や研究
機関とも連携を図り、相互理解を前提に
研究を進めてきました。海外の大学や研
究機関との長い年月にわたる共同研究を
通じて信頼関係を築いてきたことも、当
センターの設立の基盤となっています。

例えば、調査データや分析結果を講義に
用いていますし、大学院生の研究として
進めているものもあります。

当センターの今後の展開をより長いス
パンで考えたとき、「東アジア学」という
学問を構築していくことも視野に入れて
います。東アジアほど、国によって価値観
が大きく異なる地域は、世界でも稀です。
多岐に渡る社会背景と人の考え方を捉え
るために、理論的な枠組みを構築してい
くことは、研究者にとって1つの試練だ
と思います。日本と中国と韓国の違い
について多くの方にご理解いただき、その
上で共通の基盤を見つけることができれ
ば、前に進んでいくことができます。東ア
ジアが世界を牽引していく力を持つこと
に、これからも寄与していきたいと思っ
ています。



襄と八重の ゆかりのスポットを歩く

2011年11月5日、京都における新島襄と八重のゆかりの地を、本井康博 神学部教授のガイドで巡るツアーが開催された。今出川キャンパスから少し足を延ばせば、観光スポットとして馴染みの場所にも、新島夫妻との意外な縁が発見でき、参加者は案内に興味深く聞き入っていた。本誌では、その解説をダイジェストで紹介する。



同志社礼拝堂(チャペル)

正面の3枚の肖像画をご覧ください。
新島襄、山本覚馬、J・D・デイヴィス。同志社創立の立役者です。八重の夫、兄、そして洗礼を授け、結婚式を司式してくれた宣教師ですね。八重の墓共々、いずれもこれから行く同志社墓地にあります。

金戒光明寺(黒谷)

幕末に京都守護職に指名された会津藩主・松平容保が、本陣を置いたのが、ここ金戒光明寺です。黒谷とも言います。

石垣を見てください。まるで城構えです。それに、小高い丘(紫雲山)ですから天然の要塞です。境内は4万坪もあり、千人の兵士が駐屯できました。砲術師範の覚馬も、境内の宿坊に住んだはずですよ。



会津ゆかりの金戒光明寺(京都市左京区黒谷町)

会津墓地

この長い石段の先に、会津墓地があります。近くの西雲院では、毎年6月に京都府会津会が、殉難者(352人)の法要を行います。覚馬・八重の弟、三郎を始め、戊辰戦争で戦死した会津藩士の名を刻んだ石碑もあります。そう、京都府会津会と言えば、八重も熱心な会員でした。

覚馬のツテでしょうか、襄の姉(美代)や若死にした同志社教員、山崎為徳の墓は、最初、黒谷にありました(今は、同志社墓地)。

若王子神社



「哲学の道」の起点でもある若王子神社

同志社墓地に向かいます。「哲学の道」南端のすぐ先が、若王子神社です。東京の画学生、伊藤快彦は襄の永眠を新聞で知り、すぐに肖像画を描きました。伊藤は、

この宮司の息子で、現宮司の祖父にあたります。作品は、後に同志社に寄贈されました。さきほど、同志社チャペルで見ただけです。

この神社から歩いて15分ほどで、山頂に着きます。



東山三十六峰のひとつ若王子山

同志社墓地

同志社墓地です。正面の墓が襄、右にデイヴィス、左に八重、という配置です。全体の三十余基中、新島家が数基です。八重



「新嶋」八重の墓(左)と襄の墓(右)

の家族の墓は、佐久(母)、権八(父)、覚馬(兄)、三郎(弟)、久栄(姪)です。久栄が同志社女学校在学中、若き徳富蘆花と恋愛騒動を起こした話は有名です。

黒谷から移した山崎為徳の墓は、角にあります。入り口にある名物用務員、松本五平の墓にも注目してください。

天授庵(南禅寺)

南禅寺のお目当ては、水路閣(サスペンスの名所!)でも三門(石川五右衛門で有名)でもなく、天授庵という塔頭(たっちゅう)です。もともと肥後藩ゆかりの寺で、同藩の有力者、あの横井小楠(しょうなん)の墓があります。

信徒と誤解されて京都で刺殺されました。遺児、時雄の墓もここです。彼は同志



裏の埋葬予定地であった天授庵(南禅寺)

社を出て牧師となり、今治時代に、覚馬の娘(峰)と結婚します。これで、裏は峰や八重を介して、横井家の縁戚になります。

その関係から、裏の埋葬地は当初、ここのでした。父親(民治)の墓(今は同志社墓地)が、すでにありましたが、裏の場合、葬儀の前日、寺から断られたため、やむなく若王子山頂の市営墓地に葬られました。

女紅場址碑



日本初の公立女学校

南禅寺を後にして、次は京都府庁です。途中、車窓から丸太町橋西詰め南側にある「女紅場址」碑を確認してください。

明治維新以後、覚馬の建築で日本初の公立女学校(現府立鴨沂高等学校)が開校された所です。教員の1人が八重です。生徒に礼法などを教える一方で、イギリス人教員から英語を習っています。

京都府庁(容保桜)

府庁の旧本館が見えてきました。正門を入った右に「京都守護職上屋敷跡」碑があります。本陣が、黒谷から移された

京都守護職上屋敷跡地にある容保桜



のです。左は、「京都慶應義塾跡」碑です。同志社開校の前年に開校、というのも、不思議ですね。

府庁旧本館中庭の桜に注目。「容保桜」です。最近、山桜の変種と分かり、守護職にちなんで、命名されたばかりです。お殿様大好きな八重が生きていれば、さぞかし喜んだはずですね。これを株分けして、2013年大河ドラマ「八重の桜」の放映時に、キャンパスに植えたいですね。

新島旧邸

最後は、「新島旧邸」です。1878年の竣工ですから、築130年を超えます。コロニアル・スタイルで、セントラル・ヒーティング、三方に張り出されたベランダ、フローリングの台所やダイニング・キッチン、洋式腰掛便器(木造)など、京都の町

屋とは、大違いです。

ただ、よく見ると和洋折衷様式です。1階の洋間を茶室に改造したのは、八重です。敷地は約千坪。隣の新島会館あたりまで、庭でした。桐などの植樹、射的場、西洋野菜を栽培する家庭菜園などに利用されました。

新島家は、建物も暮らしも洋風っぽいので、隣接する御所や民家と比べると、かなり異色、いや浮いた存在だったでしょうね。(本井康博)



新島旧邸応接間でガイドする本井康博教授。後方は、勝海舟の書。